

那珂川町の文化財 XI

野口遺跡群の発掘調査

2001年
那珂川町教育委員会

はじめに

那珂川町に人が住み始めたのは、今からおよそ2万年前のことといわれています。

それから現在に至るまでの永い歴史の中で、多くの人がこの地に生まれ、暮らし、その人生を終えてきました。記録には残っていないそんな祖先の暮らしぶりを、私たちに教えてくれるのが、今も地中に眠る遺跡や遺物なのです。

昭和53年と平成11年に発掘調査した野口遺跡群もその一つで、古墳時代の墓（古墳）と住まいの跡が多数発見されています。

ここで、発掘調査の成果をさらにひも解き、過去にどのような祖先の営みがあつたのか見ていくことにしましょう。

古墳のはなし

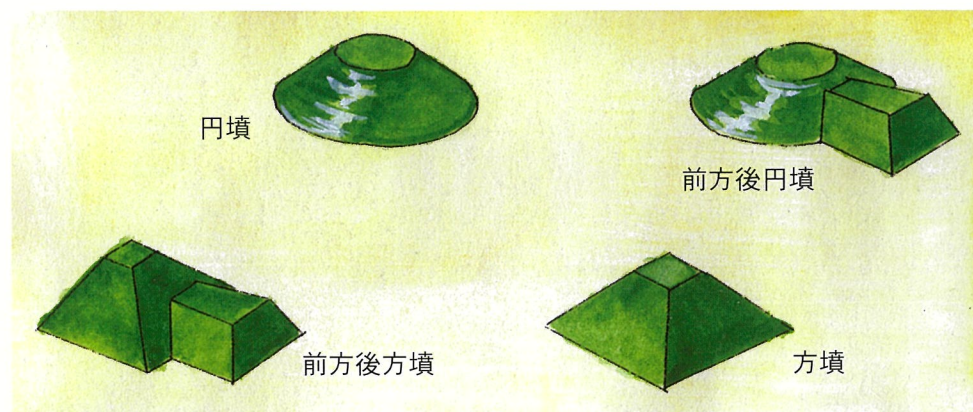
古墳とは、小山のように土を盛り上げてつくった古代のお墓のことです。古墳の内部には、遺体を埋葬する施設をつくりますが、そのつくり方は時代とともに変わっていきます。

また、古墳はお墓であるとともに、そこに埋葬された人の社会的地位や力を示すものでもありました。力をもっていた人の古墳は一段と大きく、その埋葬施設からは青銅品や玉類、鉄製品、土器といった死者へのお供え物が大量に見つかることがあります。

このような古墳が、日本各地でさかんにつくられた4～6世紀頃（今から約1700～1400年前）を古墳時代と呼んでいます。

古墳の形にはいろいろありますが、代表的なものに前方後円墳、前方後方墳、方墳、円墳などがあります。

野口遺跡群では、16基の円墳がこれまでに調査されました。



古墳のいろいろな形



この写真は、平成11年に発掘調査をした時のものです。こんもりとした形の円墳が、一列に並んでつくられているのがわかります。

また、古墳の周りにはたくさんの掘り込みが見られます。方形や長方形をしたその多くは、古墳時代の住居の跡です。

野口遺跡群の全景



箱式石棺墓



石蓋土埴墓

野口遺跡群のうつり変わり

4世紀後半～5世紀前半

野口遺跡群は、那珂川町と福岡市の境にある、東西に細長い丘の上で見つかりました。

最初の調査で丘の東側を、次に西側を調査したところ、4世紀後半から5世紀前半にかけての古墳群と、6世紀代の村の跡が広がっていることがわかりました。

ここでまず、年代の古い古墳群について見てみましょう。野口古墳群の特色として、径20m級の大型の円墳と、

径10mほどのあまり盛り土をしない小型の円墳からなる古墳群であることがあげられます。それらの古墳で見つかった埋葬施設は、箱式石棺墓や石蓋土埴墓、木棺墓、^{はこしき せつかん ぼ いしぶた ども} 竪穴式石室などとバラエティーに富み、那珂川中流域の古式古墳群の成り立ちを考える上で貴重な資料です。また、出土した土器などから、東側の古墳は4世紀後半から5世紀にかけて、西側は5世紀前半につくられたと考えられています。

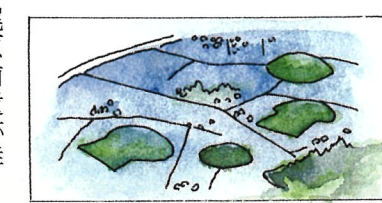


木棺墓



竪穴式石室

古代のできごとと那珂川町の遺跡

古代社会													原始社会		時代
奈良時代			飛鳥時代				古墳時代						弥生時代		
720	710	701	672	645	603	600	554	538	527	471	400	300	239	西暦	
「日本書紀」が編さんされる			大宝律令が制定される 奈良の平城京に都をうつす		壬申の乱がおこる 		大化の改新		聖徳太子が「冠位十二階」を定める		隋（中国）へ使節を送るようになる		全国に寺がたくさん建てられる		日本のおもなできごと
							群集墳が全国で造られるようになる		朝鮮に出兵し、百済と組んで新羅と戦ったが敗れる		このころ仏教が伝わる		北部九州の国造磐井が反乱をおこす		
							住居内にカマドが造られるようになる		稲荷山の鉄剣が作られる 		人物埴輪や須恵器を作り始める		鉄製の農具や武器が普及する		
											近畿地方に大和政権がおこる		日本各地で古墳が築かれ始める		
											近畿地方で前方後円墳が造られ始める 		邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏に使いを送り、親魏倭王の金印を受ける 		
地別当遺跡群			別所次郎丸遺跡群		下梶原前遺跡群 (住居跡) 		井河遺跡群(住居跡)		平蔵古墳群		観音山古墳群		白石古墳群		那珂川町のおもな遺跡
							観音山中原Ⅰ群1号墳		小丸古墳群		野口遺跡群(住居跡)		貝徳寺古墳		
							井河1号墳		カクチガ浦10号墳		カクチガ浦古墳群		松木遺跡群(住居跡)		
											安徳大塚古墳		宗石遺跡群(住居跡) 		
											妙法寺古墳群		安徳台遺跡群(住居跡)		



▲竪穴住居跡

昭和53年に調査された竪穴住居跡

竪穴住居とは、地面を円形や方形に掘りくぼめ、その中に柱を建ててカヤなどで屋根をふいた家屋のことです。写真の住居跡は7mほどの大きさで、柱や屋根は腐ってなくなっているため、地面の掘り込みと柱の跡、そしてカマドの跡だけが見つかりました。

野口遺跡群のうつり変わり

6世紀前半～後半

丘が墓地として活用されたおよそ100年後、人々はここを居住地とし、暮らし始めました。

丘の西側では、8軒の住居跡が見つかりました。大きき3m四方の隅丸方形をした住居と、長さが8mほどにもなる隅丸長方形をしたものが確認されています。どちらも6世紀前半につくられたものですが、長方形のものは大きさも形も全くことなるうえ、中からカマドと炉跡が見つかっていないことから、

住居とは別の機能をもつ工房のようなものが建てられていたのかもしれません。

これに対して東側では、4軒の住居跡が見つっています。住居は全て方形で、大ききは4m四方のものと、7m四方のものがあります。このうち3軒の住居跡には、壁ぎわにカマドがつくりつけられていました。これらの住居がつくられた時期は、出土した土器から6世紀後半と考えられます。



当時のようすをイラストで再現してみました。

村の中で人々は、土器をつくったり、家を建てるための木材をつくったりして暮らしていたのではないのでしょうか。



▲古墳から見つかった土器

右の写真の上に見えるのが古墳から出土した玉類で、下が鉄器です。玉類は小玉や管玉、メノウと滑石の勾玉に紡錘車などがあります。鉄器は斧、鎌、ナイフとして使われた刀子、矢の先につけた鉄鏃などですが、この他にもいろいろな種類の鉄器が見つっています。



▲カマドから土器が見つかったようす



▲玉類と鉄器

おわりに

最後に、これまでの発掘調査でわかったことをまとめてみましょう。

まず、4世紀後半から5世紀前半にかけて、丘のうえには古墳がつくられました。はじめは丘の東側につくられていたのが、およそ半世紀の間に西側にまでその範囲を広げていったものと考えられます。古墳は全て円墳で、径10mほどの小さなものと、径が20mをこす大きなものがあり、ひときわ見晴らしのよいところにつくられた大きな円墳は、村をおさめていた人のお墓だったのかもしれません。

それから、およそ100年後に、今度はこの丘に村がつくられ始めます。

村は、6世紀前半頃は丘の西側にありましたが、後半に入ると東側につくられるようになりました。まだ調査していないところを発掘すると、その間の時期の村のようすがさらにはっきりわかるかもしれません。

また、この丘には古墳時代の遺跡だけでなく、数はわずかですが縄文時代の土坑や弥生時代の住居跡などがあり、奈良時代の土器も見つっていて、この地が今から約3000年から1200年前にかけての長い期間、人々の生活の舞台となっていたことがわかりました。

那珂川町の文化財 XI

野口遺跡群の発掘調査
2001年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1

印刷：山崎印刷
福岡県筑紫郡那珂川町仲467

野口遺跡群遠景
(平成11年に撮影)

